



藤原 崇起

FUJIWARA Takaoki

阪神電気鉄道
社長

沿線活性化のカギは 「好奇心」と「探究心」

2009年3月、近鉄との相互乗り入れという形で阪神なんば線が誕生し、阪神電鉄は、神戸三宮、梅田、大阪難波の3大ターミナルを擁することになりました。2022年の完成に向けて「梅田1丁目1番地計画」を推進している梅田をはじめ、これらのターミナル駅が集客拠点として活性化することはもちろん重要です。加えて、そこに通ってこられる方々が住んでいる場所についても活性化することが大切だと考えました。沿線が活性化し、ひいては関西全体が活性化するためには何が必要なのか…。社員の「好奇心」と「探究心」が生み出すユニークなアイデアを募る「事業化促進制度」を立ち上げました。

その中から最初に事業化したのが、「登下校ミマモルメ」。これは、ICタグをランドセルに入れた児童が校門を出入りすると、自動的に保護者にそれを通知するメールが送られるという仕組みです。子どもがいつ帰宅するのか事前にわかり便利だと、働くお母さん方に好評をいただいている。外で安心して仕事できる環境が整備されれば、女性の活躍の場も広がりますね。

阪神電鉄は全線の90%が高架・地下を通っています。高架下の活用策として、野菜を作つてはどうかということで、「阪神野菜栽培所」と名付けた野菜工場も作りました。これまで試験的に生産していたのを、3月からは本格的な工場を立ち上げ、レタスをはじめとする葉物を栽培しています。清潔な室内で農薬を使わずに栽培しているため、収穫したものを洗わずにそのまま調理できる手軽さが受け、若いお母さんがよく手に取ってくださっているとか。家事の軽減につながれば、なによりです。

また、これらの取り組みから思わぬコラボレーションも。「阪神野菜栽培所」で、今度はイチゴを栽培したいというアイデアが出てきました。イチゴを育てるにはミツバチによる交配が必要

だということで、神戸の養蜂家の方にご協力いただくことに。思いついて、当社が持つ六甲山の遊休地を活用して実験的にはちみつを採取してみたら、なんと400kgも採れてしまいました。「阪神電車みづばちプロジェクト」の始まりです。今では、採れたはちみつを、ドレッシングやお酒などにも使っています。

より直接的に沿線住民の方々とコラボレーションした活性化策もあります。「ソダッテ阪神沿線」もその一つ。新在家駅周辺で、地元の方々を中心に一口1万円で資金を募り、それを元手に、若者たちに飲食店などを開いてもらいました。地元の応援を受け、界隈にかつてのにぎわいが戻りつつあります。

沿線でラジオ体操をするというアイデアもありました。手始めに御影駅前で近隣の方々に声を掛けて活動を始めましたが、いまやその方々が率先して取り組んでくださっています。私たちがお手伝いすることで、こういった動きをもっと増やしていきたいですね。

もちろん、地域の活性化にはインバウンドを含む観光振興も欠かせません。この3月から、近鉄特急の乗り入れにより神戸三宮と伊勢志摩が直通で結ばれ、神戸方面から伊勢方面の観光地へのアクセスがより便利になりました。また、昨年、六甲山人工スキー場の名称を「六甲山スノーパーク」に変え、子ども用ゲレンデの拡充などを行いましたが、子どもだけでなく、台湾をはじめ海外の方にも多くお越しいただけましたので、今後も積極的にインバウンド誘致を働きかけるつもりです。若い社員に負けず、私自身も「好奇心」と「探究心」を持って、地域を元気にする取り組みをどんどん打ち出していくですね。

あとは、阪神タイガースが関西の活性化に資するべく、今期こそ、ご期待に沿える活躍ができれば言うことはありません。

(談)